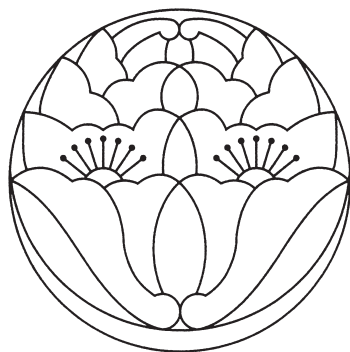


浄土宗吉水流

和讃解説書



吉水講信条

私^{わたくし}たちはこの詠唱を通じ

一、篤く三宝を敬い、仏祖の恩徳^{おんじく}に報います。

一、元祖法然上人の教えを体し、この道の興隆に励みます。

一、互いに助けあい、念仏をよろこびます。

一、自らのつとめにいそしみ、家庭の平和を念じます。

一、広く同信を募り、社会の浄化につとめます。

まえがき

吉水流詠歌集には各詠歌ごとの解説が付されているが、和讃集には従来それがなかった。和讃集にも解説が必要との要望に応えるため、昭和六十二年、宝田正道先生のお手を煩わして脱稿の運びとなった。その後、原稿の推敲、刊行の段階となって宝田先生の急逝となり、当著はまさに先生の絶筆となった。

先生の解説構想とその意図については「あとがき」を参照して下さい。

先生の莊嚴浄土を念じつつ

合掌 十念

平成二年春

詠唱教導司 松濤 基道

目次

御忌和讃	1
開宗和讃	3
高祖善導大師和讃	5
彼岸和讃	7
花まつり和讃	9
霊まつり和讃	11
いろは和讃	13
十夜和讃	15
黒谷和讃	17
無縁仏供養和讃	19
光明摂取和讃	21
地藏和讃	23
来迎和讃	25
殉国精霊和讃	27
追善供養和讃	29



二河白道和讃	31
水子地藏和讃	33
成道和讃	35
五重和讃	37
涅槃和讃	39
法然上人生誕和讃	41
入(退)堂和讃	43
三上人遠忌和讃	45
いけらば念仏和讃	47
三宝和讃	49
西誉上人鑽仰和讃	51
慶祝和讃	53
献燈和讃	55
施餓鬼和讃	57
授戒和讃	59
吞龍上人和讃	61



御忌和讃

高津ときを 作詞
松濤 基 作曲

一、承安五年の 春なかば

都の花に さきがけて

濁世を救う 声あらた

専修の門は 開かれぬ

三、代々の帝も 御感あり

賜名八度 くだされて

勅会と決る 御忌の庭

念仏の声 いや高し

二、み教えあまねく 広まりて

心に染み入る お念仏

流れあふれて 吉水の

歴史は清し 八百年

四、華頂の嶺は 松青く

久遠の教え 日々若し

聖 法然 たたえつつ

拝む命の やすけさよ

宗祖法然上人の御忌を奉讃する歌である。

御忌というのは、元来、天皇の忌日に限って用いられる尊称であったが、大永四年（一五二四）正月、今から四百九十余年前、後柏原天皇から、特に法然上人の忌日にだけは天皇並みに御忌と称してよい、とのお許しがあった（大永の鳳詔）。上人の遺徳を追慕して、毎年春、京阪地区の末寺の人たちが御廟のある知恩院に集まって、一七昼夜にわたる御忌会を修せよ、という全く異例の勅令である。それ以来、上人の忌日に限って御忌会という名で、総大本山はじめ全国各地で毎年盛大に勤められるのである。

和讃の本文は、承安五年（一一七五）春の立教開宗以来、多くの人々の間に広く念仏が広まったこと、特に前記御忌の名を戴いたことや八度にわたって大師号を贈られた、朝廷の深い帰信ぶりに触れ、その光栄と

ともに「聖法然」上人の教えが、いよいよ華頂の祖山中心に栄えていることを、ソツなく讃え上げている。

「吉水」は上人の草庵のあった東山のほとりの湧水から転じて念仏の教えの本拠、あるいは上人住居の代名詞などとして使われる。

「賜名」とは生前の立派な言行を賞して死後贈る尊称で、上人は滅後四百八十六年の元禄十年（一六九七）に東山天皇から円光大師、同五百回忌の宝永八年（一七二一）に中御門天皇から東漸大師と賜わって以来、五十年ごとに慧成・弘覚・慈教・明照・和順・法爾と、歴代天皇から都合八度も重賜の栄光に浴している。

「華頂の嶺」は東山の一峰で、知恩院の山号を華頂山というのはその地理的環境による。

開宗和讃

成田 教淳 作詞
松濤 基 作曲

一、承安五年の春弥生

祖師は御齡四十三

弥陀の救いの手をのべて

開き給いし浄土門

摂取不捨の み光を

仰ぎて八百五十年

この喜びをことほぎを

思いあらたに報謝せん

南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏

二、愚痴のわが身を 煩惱を

浄め給えと吉水の

流れにみ名を称うれば

尊き教え ありがたき

光明徧照 月影の

ながむる人にすみわたる

この喜びを 宿縁を

思いあらたに報謝せん

南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏

三、祖師のお遺訓 たのもしや

生けらば念仏の功つもり

死なば浄土にまいりなん

とてもかくてもこの身には

思いわずらうことぞなき

この身このまま救わるる

この喜びを 恩徳を

思いあらたに報謝せん

南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏

宗祖法然上人が念仏の法門をもって立教開宗されたために受ける喜びを、思い新たに報謝せん、と歌っている。

第一節は、承安五年（一一七五）の開宗から八百五十年の今日まで連綿と続く教化の光を寿ぐ。「弥生」は陰暦三月、「祖師」は法然上人、「摂取不捨」は「光明は徧く十方世界を照らし、念仏の衆生を摂取して捨てたまわず」という「撰益文」の結句で、念仏申す者は如来の光明に照らし護られることを示す。

第二節は、月影が眺める人の心にすみ渡るように、称名の教えが普及する喜びを歌う。「宿縁」は前世から定められた因縁で、ここでは念仏の法門にめぐり会えたありがたさを宿縁と受け取ったもの。

第三節は、「祖師のお遺訓」つまり『一枚起請文』のたのめしさを讃える。『一枚起請文』は、建暦二年（一一二二）正月、上人が亡くなる二日前、すなわち

二十三日、側近の弟子勢観房源智に授けられた、一枚の誓言書というべきもので、「ただ一向に念仏すべし」の一句に浄土宗の安心起行を要約して示した、貴重な遺訓である。「生けらば念仏の功つもり」云々の今様歌（七五調四句）は上人の作として知られる。

「吉水の流れ」は、他でも解説したとおり、法然上人の草庵があつた付近のせせらぎから「吉水」の名が生まれ、やがてそれが上人の異名や教義の形容として冠されるようになった。そして、浄土宗史そのものも「吉水の流れ」といわれるほど一般化して現在に至っている。浄土宗の詠唱に「吉水流」という名を冠しているのも、もとよりそのためであることは、いうまでもない。

高祖善導大師和讃

平松 大真 作詞
松濤 基 作曲

一、仰いで本地を尋ねれば

四十八願成就身

伏して垂迹訪えば

専修念仏破衣の比丘

三、世のいましめと浄業の

難き相を示したる

二河白道の譬こそ

永遠に朽せぬ教えなれ

五、偏依導師の泉より

流れ出でたる吉水の

二祖の心を映しつつ

展け行く末ぞ頼もしき

二、世尊の真意弥陀の素意

つたえて作る観経疏

霊瑞ここに顕われて

如来直授の尊さよ

四、真葛が原の春の空

半金色の身を現じ

二祖対面の證誠こそ

夢にも奇しき契りかな

六、高祖の跡を偲ぶもの

誰か念仏忘れめや

南無阿弥陀仏あみだ仏

南無阿弥陀仏あみだ仏

浄土宗で「高祖」と尊信する善導大師の徳を偲び、

宗祖との契りの深さを讃嘆した歌。

「善導大師」は中国唐代の浄土教大成者。宗祖法然上人は大師の主著『観経疏』(観無量寿経の注釈書)の一文に導かれて専修念仏の浄土宗を開かれた。その説の中心は「偏^{ひと}えに善導に依る」である。文中ではこれを「偏依導師」と表現している。

「四十八願成就身」とは、四十八の大願を建てて西方極楽を築き、その教主となった阿弥陀仏。「本地」とは「垂跡」とつづき、仏菩薩が衆生済度のため、仮りに神の姿をとってこの世に現れるのを意味する熟語で、大師は阿弥陀仏の化身と崇められていた。「破衣の比丘」は破れ衣をまとった僧を指す。

「世尊」は釈迦、「靈瑞」はふしぎな瑞相、「如来直授」は仏さまから直々にいただく意である。

「浄業」は清く尊い行い。「二河白道」は善導大師が

前記『観経疏』に説かれた教えで水火互いに荒れ狂う両河の中央にある狭い白道を渡って、念仏行者がこの土から彼の国へ往生を遂げるという譬喩譚。

「真葛が原」は京都の地名で、東山西麓一帯の台地、ここで宗祖が夢の中で高祖と会う「二祖対面」という教法伝授の奇瑞を果たされたと伝えられる。その時の高祖の姿は、紫雲に乗り、上半身は墨染、下半身は金色という、いわゆる「半金色の身」であったという。

「吉水」は他にも度々出てくるが、宗祖法然上人の草庵があった東山大谷の別名、知恩院付近を流れるせせらぎの名から来たらしく、「円山安養寺内に一池あり、天台三昧流の座主灌頂の時この水を用う」(山城名勝志)という説もある。上人をめぐる教説その他を形容して使われる場合が多い。

なお、「二河白道」について詳しくは別項『二河白道和讃』の解説を参照されたい。

彼岸和讃

成田 教淳 作詞
松濤 基 作曲

一、生きとし生けるいのち皆

三界流転 定め無し

われら仏性 具せる身は

仏の道に 目覚むべし

ただ吉水の 行者にて

弥陀の名号 称うれば

嬉しや花(月)の 春(秋) 彼岸

衆善奉行の 浄土なり

南無阿弥陀仏 阿弥陀仏

二、菩提を願う 人は皆

勝縁すでに そなわれり

日々に念仏の 積りなば

生死の憂い 離るべし

ただみ仏に 生かさるる

弥陀の名号 称うれば

嬉しや花(月)の 春(秋) 彼岸

自他善根の 浄土なり

南無阿弥陀仏 阿弥陀仏

註 秋彼岸の時は、花を(月)に、春を(秋)に読み替える。

春秋の彼岸会に際して、弥陀の名号を称える念仏行者は、みな安らかに浄土往生の功德を得ることを歌う。

「三界流転」の三界とは、一切衆生が生死を繰り返して輪廻する三つの世界、すなわち欲界（欲望にとらわれたものが住む世界）・色界（前の欲を離れた者の住む世界）・無色界（物質を超えた世界）の三をいい、われわれは常にこれらの境をさまよい流転していることを指す。しかし、幸いにも人間は悉く「仏性具せる身」、つまり誰でも修行次第で仏になれる性根をもっているから、早く仏道を悟るがよい。「吉水の行者」は、法然上人の教えを信じ行う人々、「衆善奉行」はもろもろの善を行うこと（七仏通戒偈の一節）を示す。「菩提」はさとり、「勝縁」はすぐれた因縁である。「自他善根」は自分も他人と共によい報いを受けるに足る功德の業因。

ちなみに、彼岸会は、三月（九月）の春分（秋分）

を中日として前後七日間、太陽が真東から出て真西に沈むのを見て、西方浄土に思いを馳せる（日想観）ための法要であるが、元来は「到彼岸」、すなわち迷いに満ちた此岸から悟りの彼岸へ渡るため説かれた六度（布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧）を修行することからきた、一種の仏道修養週間といってよい。お墓参りや先祖供養も結構であるが、それ以上に、「暑さ寒さも彼岸まで」の快適な季節感到感謝して、前記六度（六波羅蜜）の修業を心がけることを忘れてはならない。

なお、この和讃では、秋彼岸の時は、「花」を「月」に、「春」を「秋」に読み替えて詠唱するように作詞者が細かく指示している。珍しいことであるが、また親切で行き届いた配慮であるといえるだろう。

花まつり和讃

平松 大真 作詞
松濤 基 作曲

恭敬礼拝誕生仏
くぎようらいはいたんじょうぶつ

一、仰げば遠し三千年
あお へとお

三、昔をしのぶよすがとて

五、仏のおしえつちかいて

インドの春のカピラ城

花のかずかずつみあつめ

心にさきし一輪の
りん

卯月八日の花園に
うづきようか はなぞの

心をこめてうつくしく

花をもそえてもろともに

生まれたまいし国の王子
う くに みこ

ふきたてまつる花御堂
はな みどう

祝いまつらん花まつり

二、七歩あゆみて天地を
ななほ あめつち

四、甘露の雨になぞらえて
かんろ あめ

六、甘茶の杓は小くとも
あまちゃ しやく ちひさ

指さしながら呱呱の声
ゆび ここ こえ

甘茶のかおりかんばしく

そそげば匂う法の水
にお のり

たかくも唯我独尊と
ゆい が ひとりごん

老も若きもこもごもに
おい わか

清くむすびてとこしえに
きよ

四方にひびきしかしこさよ
よも

そそぎまつるぞありがたき

たたえまつらん花まつり

「花まつり」はいうまでもなく仏祖釈尊のお誕生を慶よろこび祝い、四月八日のその日を寿ぐお祭りである。釈尊降こうたん誕え会、仏生ぶつしょう会、灌かん仏ぶつ会、浴りゅう仏げ会、竜華りゅうげ会などが古来からの名称で、「花まつり」は近年、浄土宗がつけたのが一般化したのだという。

お祝いの行事は、もちろんインドで始まったが、日本では早く推古朝時代から行われ、宮中行事から次第に民間に普及した。一般的には、この日、各寺で生誕の地ルンビニー園になぞらえた花御堂を設け、裸像の誕生仏を安置して甘茶を注ぎかける。また、張り子の白象をひいて子どもらが街頭を練り歩く地方もある。成道じょうどう会・涅槃ねはん会と並ぶ仏教三大会の一つとして親しまれている。

この和讃は、インドの北辺、ヒマラヤのふもと、カピラ城で呱呱の声をあげたばかりの王子（釈尊）が、

七歩歩んで「天上天下唯我独尊」と叫んだとか、竜王が甘露を注いで産湯をつかわせたとかいう伝説を取り上げて、美しくまとめである。

「三千年」は大凡おおよそで、実際は二千五百年ほど昔のこと、「唯我独尊」は従来、とかくお山の大将おれ一人、というに似て、自分一人だけが偉い自己顕示欲の表示のように誤解されがちであったが、これは、われわれ一人一人に与えられた天下一品のいのちの尊さを強調した言葉と解すべきであろう。

「花御堂」はレンゲ草など春の花々で屋根を葺いた小堂である。また「甘露」は天子が仁政を行った治世に、天が降らせたという、中国伝説の甘いつゆであるが、仏教では日照りの際、守護神の竜王が雨を降らすというところから、これに擬よしたわけであろう。「法の水」は仏の教えを流れる水に譬えたもの。

霊まつり和讃

高津ときを 作詞
松濤 基 作曲

一、
無常の風に誘われて 花の浄土に旅立ちし

三、
祖先の墓に詣でつつ 七世の父母の恩徳を

親兄弟や愛し子を 里に迎えて想い出の

念仏修して感謝する これぞ真の孝の道

涙あらたに回向する 今宵うら盆霊まつり

光明徧照と打つ鐘は 摂取不捨とぞ響くなれ

二、
精霊棚に海山の 百味飲食供養する

四、
盆提灯をかざしつつ 御霊を迎えまた送る

救倒懸のころざし 無縁の餓鬼も永久の

習いゆかしきこの夕 濁世の闇に泣く人の

生命水得て蘇える ダラニの功德有難や

心に信の灯をともし 南無やうら盆霊まつり

お盆の霊まつりを歌った作品である。

いうまでもなく、お盆は梵語ウランバーナを音訳した孟蘭盆の略で、「救倒懸」つまり、逆さに吊り下げられた苦しみを救うという意味であるが、主として先祖供養を目的とする。

霊まつりは、お盆の精霊会の俗称で、正式には孟蘭盆会^{ぼんえ}という。インドの農耕社会における先祖崇拜の思想が仏教に受けつがれ、中国を経て日本に伝来、宮中の行事から一般の民間信仰として今に盛行する。『孟蘭盆経』によれば、仏弟子目連が、餓鬼道におちた母親の苦難を救うため、釈尊に教えを乞うて、七月十五日（僧自恣^{じし}の日）に、衆僧にさまざまな飲食を供養した故事が起源であるという。

現在では、七月（あるいは八月）の十三日に迎え火を焚いて先祖を迎え、十六日に送り火とともに送りか

えす行事が一般的で、その間、棚経回り、精霊（灯笼）流し、盆踊りなど、いろいろの催しが派生した。

「精霊棚」は祖先の霊を迎えるために設ける仏壇めいた棚で、供物や膳を置く。「ダラニ」は祈りのための咒文^{じゅもん}、「七世」は七生、つまり自分に至るまでの七世代であるが、後には父、祖、高祖、曾祖を四世とし、これに自己とその子・孫の三世を加える。

「光明徧照」は十方世界、念仏衆生、「攝取不捨」とつづく一連の教句（摂益文^{しやくやくもん}）で、念仏申す者はすべて如来の慈悲の光明に攝取護念される利益^{りやく}を受けることを指す。

わが国では、お盆は正月と並んだ二大節季とされており、やぶ入りや中元の風習とも重なるが、たとえば中元の贈答は忘れても、祖先への報恩慕参は欠かさず行うようにしたいものである。

いろは和讃

無能上人 御作
松濤基 作曲

一、一心歸命 阿弥陀仏

四、七宝莊嚴 微妙国

二世安樂の 御誓願

八功德水の 金池中

二、三心具足の 修行者は

五、九品蓮華の 上に座し

四生麤惡の 身をすてて

十地願行 成就せん

三、五妙快樂の 体をうけ

六、南無阿弥陀仏 阿弥陀仏

六通無礙の 徳を得て

南無阿弥陀仏 阿弥陀仏

(中略)

作者の無能上人は、江戸時代中期の高僧。奥州石川郡巢須釜郷（福島県）の生まれで、俗姓は矢吹氏、諱を学運、字は良崇といったが、遁世の後には守一無能と号した。

十七歳で出家、浄土の門に入り、日課念仏三万乃至六万の行者となる。三十一歳の時、自行化他のため自ら男根を断つて勇猛果敢に修行を続けたが、多数の詠草や著述を残し、三十七歳の若さで往生をとげた。生涯総計三億六千九百三十万遍の称名隠士として尊信されている。

この和讃は、本来『伊呂波讃』といい、七五調五十八句から成る。冒頭十句は一から十までの数字を頭に置いた序詞的部分、それに続いていろは歌の一字ずつ冠した句を並べ、「京九重の花の台に」と結んだものであるが、一般に詠唱されているのは初めの序詞だけである。

しかし、この序詞は、一心に阿弥陀仏の本願に帰し、三心具足の念仏修行すれば、最後には極楽に生まれて蓮台の上に坐する功德にあずかることを、巧みに詠み込んである点、独立讃としてもまとまっていると評価

してよからう。やや難語が多いので解説を要する。

「三心具足」は、浄土宗の念仏実践法（安心）として建てられた三種の心がまえを具えること、三心とは至誠心（真実の心）・深心（凡夫の機根と本願の力とを深く信ずる心）・回向発願心（自他一切の善根を捧げ回らして往生を願う心）の三つ。「四生麤惡」とは、あらゆる生き物を、その生まれ方の相違によって胎・卵・湿・化の四生に分類するが、いずれも粗暴で悪と迷いに満ちている世界。「五妙快樂」は、色・声・香・味・触の五感がいずれも清らかで妙なる極楽の境地を指す。「六通無礙」は、六神通すなわち超人間的な六つの能力（神足・天眼・天耳・他心・宿命・漏尽通）が、何物にもさまたげられないで機能すること。「七宝莊嚴」は、金銀その他七種の宝石で飾られていること。「八功德水」は極楽浄土の池などを満たす八種の優れた特質や功德のある水。「九品蓮華」は上品上生以下三品九生に分けられた念仏往生者が、それぞれに坐する蓮台。「十地願行」は、菩薩が修行すべき五十二段階までの段階の内、特に四十一位から第五十位までの十階位におけるそれぞれの誓願と修行のことである。

十夜和讃

吉水 大信 作詞
曾我 晃也 作曲

一、
帰命頂礼阿弥陀仏
きみうちよろいあみだぶつ

摂取のみ光遍きて
せつしゆ ひからあまね

不捨の救いをもろ人に
ふしや すく びと

垂れて誓をとげ給う
た ちかい たも

三、
十日十夜の念仏を
じゅうにちじゅうや ねんぶつを

積まば浄土の千年に
つ まば じようど せんねん

勝る功德と諭されし
まさる くとく さと

仏の教えありがたや
ほとけ おし

五、
秋酣の山門に
あき存 さんもん

響く鉦の音いや高く
ひび かね ね たか

仏を讃う声すなり
ほとけ たと こえ

南無阿弥陀仏 阿弥陀仏
なむあみだぶつ あみだぶつ

二、
十夜の因縁を尋ぬるに
じゅうや えにし たず

時の帝は後花園
とき みかど ごはなぞの

平貞国発心し
たいしだくにほっしん

お別時せしに始まれり
べつじ はじ

四、
仏の御名を唱うれば
ほとけ み な とな

明けく正しく和かに
あ ただ たた なこや

永久に生かされ健かに
とわ い すすこや

心も身をも育ちゆく
こころ み そだ

お十夜のいわれとその功德を簡明に歌った和讃である。

お十夜は十夜会とか十夜ともいい、特定の期日（別時）を設けて、多く秋の十、十一月頃、一般各寺で行われる念仏会。鎌倉の大本山光明寺の十夜法要は特に名高い。

そのいわれは、本文にも詠み込まれてあるように、約五百五十年ほど昔の室町時代、後花園天皇の代に、伊勢守平貞経の弟貞国が、京都の真如堂（天台宗）で発心出家しようとして修した別時念仏が基といわれている。『無量寿経』巻下に、この世で十日十夜の間善行を修することは、仏の国で千年もの間衆善奉行を続ける功德よりもお尊い、と説かれているが、その教えにのっとり、後、光明寺にこの法要を移したという。今日では、十日の期間をあるいは五日あるいは三日、一日くらいに短縮して行われているのが普通であるが、

浄土宗としては、とかく失われがちな称名の機会を取り戻す大切な行事であるといえよう。

「帰命頂礼」とは、身命を捧げて仏・法・僧の三宝に帰依、頭を地につけて礼拝すること。古来、その恭順を示す意味で、和讃讃文の冒頭にこの四文字を冠する例は多い。「撰取」と「不捨」は一語を成す熟語で、「光明偏照、十方世界、念仏衆生」に続く結句として、仏が慈悲の光を十方に照らし、念仏者を悉く救い取って捨てないことを意味する。

なお、特に鎌倉の大本山光明寺のお十夜法要は、明応四年（一四九五）、観誉祐崇上人が後土御門天皇の勅命を受けて行われるようになっただけに、今も盛んに近郷近在の人々の信仰を集めていることは周知のとおりである。

黒谷和讃

古歌
松濤基作曲

- 一、 帰命頂礼 黒谷の
円光大師の 教えには
人間わずか 五十年
花にたとえて 朝顔の
露よりもろき 身を持ちて
なぜに後生を 願わぬか
たとえ浮世に 永らえて
楽しむ心に 暮すとも
老も若きも 妻も子も
おくれ先だつ 世の習い
花も紅葉も 一盛り
譬えば我も 一盛り
- 七、 十や十五の 蒼花
十九や二十の 花盛り
世帯盛りの 人々も
直に頓死を するもあり
今夜枕を 傾けて
朝なに笑いし 幼児も
暮には煙と なるもあり
隣れはかなき 我等哉
娑婆は日に日に 遠ざかり
死するは年々 近づきて
今日は他人の 葬礼ぞ
明日は我身も 図られず
- 十三、 之を思えば、皆人よ
親子兄弟 夫婦共
先だつ人の 追善し
念仏唱えて 信ずべし
あら有難や 阿弥陀仏
助け給えや 阿弥陀仏
- 十四、 念仏唱えて 信ずべし
あら有難や 阿弥陀仏
助け給えや 阿弥陀仏
- 十五、 念仏唱えて 信ずべし
あら有難や 阿弥陀仏
助け給えや 阿弥陀仏
- 十六、 念仏唱えて 信ずべし
あら有難や 阿弥陀仏
助け給えや 阿弥陀仏

(※通常一、二、三番と(四)(五)とを簡略してお唱えする習慣になっている)

作者不詳の古讃である。恐らく江戸中期の談義僧か説教僧が、勧化のために作ったものであろう。題名の「黒谷」は、京都比叡山の一角にある地名（現在の黒谷はそれを新黒谷として移したもの）で、円光大師、すなわち宗祖法然上人がその地に住い修行されたところ。だから、上人のことを「黒谷源空上人」と呼び、この歌を「黒谷上人花和讃」ともいう。

人生の無常迅速を花に譬えた具体的な引例でとらえ、先亡の追善やわが身の後生には念仏回向の必要なことを、円光大師の教えとしてやさしく詠嘆している。

現在十指に余る「無常和讃」が伝えられているが、内容的にはそれらと同様、人間の弱味を一番強く指摘する点で、詠唱中でも、つい涙声にさせられてしまう人が多いのではないだろうか。

人生わずか五十年とは昔のことと、現代は八十歳を中心とする高齢化社会となった。しかし、「露よりも

ろき身」であることに変わりはなく、老若男女、親子の間で「おくれ先立つ世の習い」は一向に改めるわけにはいかないのが真相である。「明日は我が身も図られず」の覚悟は、いつでも持っていることが大切である。

明日ありと思うこころのあだ桜、夜半に嵐の吹かぬものとは、誰も保証してくれないのが人生だからである。

したがって何よりも後世安楽を祈念して、まず念仏を称える生活、「一大事とは今日ただ今のこと」と割り切る心構えが必要となってくるのである。夜床に就く時は、永遠の眠りに入るつもりで念仏、朝目覚めた時は、再び新たな生命を与えられた喜びの念仏、そうした一息一息のリズムの中に充実した「今」の積み重ねを勧めるのが、この『黒谷和讃』の教えるところと知りたい。

無縁仏供養和讃

吉田 光覚 作詞
松濤 基 作曲

一、 思おもえばこの世よに生うれきて

幸しあせ願ねがわぬ人ひとなきを

二、 宿世すくせのえにし儚はかなくて

栄さかえし家いえも夢ゆめの跡あと

三、 守まもる世継よつぎの影消かげきえて

古ふるき墓石ぼせきは苔こけむしぬ

四、 無縁むえんの御霊みたま今いまもなお

無明むみょうの空そらに迷まようらん

五、 弥陀みだの御慈悲おじひはへだてなく

弔とむろう人ひとなき奥津城おくつきに

六、 香華こうげを手向たむけ懇ねんに

追善供養ついぜんくようの御念仏おねんぶつ

七、 南無阿弥陀仏なむあみだぶつ 阿弥陀仏あみだぶつ

南無阿弥陀仏なむあみだぶつ 阿弥陀仏あみだぶつ

跡継ぎがないため、無縁となって野辺に朽ち果てた、弔う人もない墓前に、香花を手向けて供養してあげようとする、やさしい仏心吐露の和讃である。

最近、墓地も入手難であるし、墓石をつくるにも相当のお金がかかる。その上、先祖代々の墓のない、若い世代では、たとえ世継ぎであっても、信仰心が起こらず、先祖供養への関心さえうすい人々が少なくない。したがって、「栄えし家も夢の跡」「古き墓石は苔むしぬ」と詠われているとおり、訪れる人もなく、墓苑はさびれる一方である。

阿弥陀仏の大慈悲は、念仏回向によって、縁の有無にかかわらず、彼らを摂取して下さることを、深く信じてほしいものである。

「宿世のえにし」とは、前世からの約束、因縁のこと。仏教では過去・現在・未来の三世因果ということ

を説く。

「無明の空」とは、われわれ人間存在の根底にある根本的な愚かさ、迷い（煩惱）を指す。生老病死その他すべての苦をもたらす原因で、広く大きい空間ということから空、暗く愚かでうつとうしい点で黒闇あるいは長夜に譬えることが多い。

「奥津城」は墓のことであるが、主として神道で使う用語。

戦後七十余年経った現在、沖縄や東アジア各地戦跡に放置された兵士の遺骨は、未だ収容されることなく、その不遇をかこっていることだろう。せめて、その霊に朝夕、無縁仏として供養回向を捧げることこそ、日本人すべての誠意というべきではなからうか。

光明攝取和讃

古 歌
三宅 勝 作曲

一、人のこの世はながくして

かわらぬ春とおもいしに

無常の風はへだてなく

はかなき夢となりにけり

三、されど仏のみ光に

攝取されゆく身になれば

おもいわずろうこともなく

とこしえかけて安からん

二、あつき涙のまごころを

みたまの前にささげつつ

ありしあの日のおもいでに

おもかげしのぶもかなしけれ

(九小節目以降の旋律にて)

南無阿弥陀仏 阿弥陀仏

南無阿弥陀仏 阿弥陀仏

今は亡き人の面影を偲び、悲しみの中にも、仏の慈悲の光によつて救われてゆく身である、わが心に言いきかせながら、いろいろ思い患うことなく永遠に安かれ、と祈る心を詠んだ和讃として秀作に属する。

作者不詳の古歌ということであるが、三番まである歌詞のそれぞれ三小節目、すなわち、一番 無常の風はへだてなく 二番 ありしあの日のおもいでに 三番 おもいわずらうこともなく を、それぞれ古歌につけ加えたものである。語句の端々に近代調が見えることから推すと、明治に入ってから作られたものではなかろうか。短いけれど、実感がこもっている。

まず、第一章では、人のいのちのはかなさを説く。

『黒谷和讃』にも歌われているように、人の世を吹く無常の風は、誰彼の別なく巻きこんで平和の春を思いもかけぬ悲哀の夢と粉々に砕きつぶしてしまうものである。

第二章では、それを受けて、遺族たちが熱い涙をこ

らえながら、故人の御霊前に、ありし日の写真などを掲げ、それぞれ互いに生前の想い出などを語り合う、悲しみの場を歌う。

そして第三章では、やがて自分も含めて、誰しもが遅かれ早かれ浄土に召され、み仏の慈光に救い取られていく身であることに目覚めて、ただよくよと悲しみ案ずることなく、永^{とこ}えの安心立命をかちとるように努めるがよい、と諭^{さと}しているわけである。

法然上人は、禅勝房というお弟子に、「生けらば念仏の功つもり、死なば浄土へまいりなん。とてもかくても此身には、思いわづらふ事ぞなきと思ひぬれば、死生ともにわづらひなし」と教示されたが、『光明撰取和讃』は、この法語の趣旨を広めるために作られたといつてもよいと思う。

なお、「光明撰取」は、「光明徧照、十方世界、念仏衆生、撰取不捨」（撰益文）の意である。

地藏和讃

古歌
松濤 基作曲

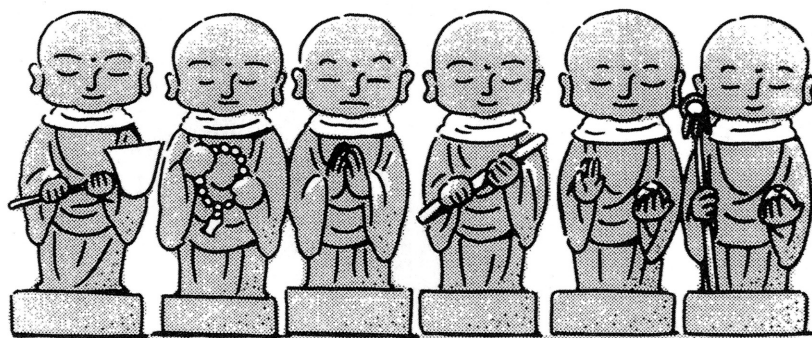
- 一、これはこの世のことならず
死出しでの山路やまじの裾野すそなる
- 二、賽さいの河原かわらのものがり
聞きくにつけても憐あわれなり
- 三、二つや三つや四つ五つ
十じゅうにも足らぬみどり児こが
- 四、賽さいの河原かわらに集まりて
父上ちちのうへこいし母ははこいし
- 五、河原の石をとり集め
これにて回向えこうの塔をつむ
- 六、一重じゅうくんでは父のため
二重じゅうくんでは母のため
- 七、日も入りあいのその頃は
地獄じごくの鬼おにが現あらわれて
- 八、くろがね棒をとりのでて
積つみたる塔をおしくずす
- 九、その時能化のうけの地藏尊じざうそん
われを冥途めいどの父母ちちははと
- 一〇、思うてあけくれ頼めよと
幼き者こころをみ衣みえの
- 一一、裳裾もすそのうちにかき入れて
憐あわれみ給うぞありがたき
- 一二、未だ歩まぬみどり児こを
いだきかかえてなでさすり
- 一三、憐あわれみ給うぞありがたき
南無阿弥陀仏
- 一四、南無阿弥陀仏阿弥陀仏
南無阿弥陀仏阿弥陀仏

この和讃ほど古くから広く大衆の心をとらえ、子
思う親の涙を誘った和讃も少なからう。それほど人口
に膾炙かいしやしている。しかし、同名ではあるが、歌詞は幾
種類もあり、長短もいろいろである。ただ、大部分は
同工異曲どうこういきよくで、一つの元歌から分派したものに相違ない。
江戸時代から宝永・享保ほうえい・きやうほの頃、夭逝ようぜつした幼な児の霊は、
賽の河原に集まり、地藏菩薩によって守護されるとい
う民間信仰とともに普及した、とするのが、一般的
な通説のようである。

浄土宗で詠唱する歌詞は、これらの元歌のエキスを
適宜まとめ、地獄の鬼にいじめられたみどり児を、
抱きかかえて憐れみたもう地藏尊のありがたさを強調
したもの。

例えば、「父上こいし、母こいし」の次に、元歌は
「恋し恋しとなく声は、この世の声とは事変わり 悲

しき骨身を通すなり 彼の
嬰兒みどりごの所作として」とあり、
「河原の石を とり集め」
云々と続いていたわけであ
る。また、一重二重と父母
のために塔を組む後へは、
「三重くんでは古里の 兄
弟我が身と廻向して 昼は
独りで遊べども」と入れて
「日もいりあいのその頃は」
以下へつなぐのが、元の形
であった。
ともあれ、この和讃は親
よりも子どもに聴かせると
宗教心を起こす機会にもな
るようだ。



来迎和讃

恵心 僧都 御作
松濤 基 作曲

歸命頂礼 弥陀如来

一、攝取不捨の光明は

念ずる所を照すなり

観音勢至の来迎は

声を尋ねて迎うなり

二、娑婆界をば厭うべし

厭わば苦海を渡りなん

安養界をば願うべし

願ば浄土に生るべし

三、草の庵は静かにて

八功德池に心すみ

タベの嵐音なくて

七重宝樹に渡る也

四、臨命終の時いたり

正念違わで西にむき

頭を傾け手を合せ

いよいよ浄土を欣求せん

五、聞けば西方界の空

伎楽歌詠ほのかなり

見れば緑の山の端に

光雲遙かに輝けり

六、この時身心安くして

念仏三昧現前し

毫光我身を照して来て

無始の罪障消滅す

七、光雲漸やく近づきて

瞭仰すれば弥陀如来

相好円満し給いて

金山王の如くなり

八、鳥瑟も高く現われて

晴のみ空に緑なり

白毫右に旋りては

眉の間に輝けり

九、観音勢至諸菩薩埵

光の中に充滿てり

各々威徳あらわれて

声々行者を誉め給う

十、昔は大悲の御利益を

僅かに伝え聞きしかど

今は弥陀の引接を

心のままに蒙れり

十一、冀わくは弥陀世尊

行者の誓いを愍念し

大悲誓願あやまたず

来迎引接たれたまえ

南無阿弥陀仏 阿弥陀仏

南無阿弥陀仏 阿弥陀仏

作者の恵心僧都は、源信といい、平安中期天台系に出た、日本浄土教の先覚者である。その主著『往生要集』は法然上人の浄土立宗に深い影響を与えた。多くの学問的著述の他に、『極楽六時讃』『十楽和讃』など、大衆向けの讃仏歌も作って教化に努めた。本和讃もその代表的一つに数えられている。

鎌倉時代以後、この讃は広く多くの人々の間に詠唱されたらしいが、内容的には、弥陀三尊が臨終に際して光まぶしく念仏行者を来迎引接したまう様子を述べたもので、七五調四十八句から成る。若干後世の添削はあるにしても、全体として行文流麗の秀作といつてよからう。僧都が迎講を創始したり、聖衆来迎図を描いたりしたと伝えられる点から見ても、その真作と考えられる。

文中には、さほど難解な語もないが、「八功德池」

や「七重宝樹」は、ともに極楽浄土にある池や樹木をさす。「瞻仰」は仰ぎ見つめること、「烏瑟」は仏頂・肉髻とも漢訳して、仏の頭上に肉塊が隆起したように突出しているありさま。仏の特長である三十二相の一つ。「白毫」もその類で、仏の眉間に渦巻く白い旋毛のこと。「引接」は引導接取の略で、浄土教では阿弥陀仏が自らの光の中に衆生を導き、摂め取って極楽へ救い上げることという。「愍念」は憐れみ念じてお護り下さること。「大悲誓願」は大いなる慈悲の心をもってお誓い下さった公約。すなわち、阿弥陀仏は、昔、法蔵比丘として修行中、四十八の大願をたて、それが成就しないかぎり仏になるまい、との決意の下に成仏され、今現に西方極楽浄土の教主として説法されているから、約束どおり、念仏する者に来迎引接したもうことは間違いのない、との意である。

殉国精霊和讃

池上 霊心 作詞
松濤 基 作曲

(散りませし精霊安かれと祈りつつ 唱え奉る)

一、平和の光身にうけて

今日を寿ぐ同胞よ

忘るるなかれ殉国の

尊き命そのいさを

二、瞼にうかぶ門出の

別れの言葉あの姿

ありし面影しのびつつ

はげみ進まん法の道

三、心をあわせ助けあい

争いを捨て徳をたて

平和日本を築くこそ

精霊に報ゆる道ぞかし

四、ゆきにし精霊願わくば

国のゆくてを守られて

世界平和の礎に

力とめぐみ垂れたまえ

五、浮世の様は変れども

くちせぬ誠とこしえに

たたえ祀らん御精霊

南無阿弥陀仏 阿弥陀仏

「散りませし精霊^{みたま}安かれと祈りつつ唱え奉る」と添え書きされているように、作者が殉国の尊い命に対し、真心こめて祈念する心情がよく出ている。第二次大戦に出兵し、国のために散って行った人々の、母国を後に別れの言葉を残して、門出^{かどいで}した相を、瞼に思い浮かべながら、戦後はひたすら争いや、いさかきを捨てて、平和日本の建設に励むことこそ、彼等に報ゆる道であることを強調したもの。世界平和の礎となった、精霊の至誠^{まこと}を讃え、ひたすらその安らかな眠りを祈念する和讃である。

戦後すでに七十年余を経過し、敗戦の焦土から不死鳥のように甦^{よみがえ}った日本は、奇跡的な繁栄を遂げた。特にその経済的発展は、世界に冠たる驚異的なものである。

悲惨極まる戦争の実情は、いろいろ語り継がれつつあるものの、その体験者は老齢となり、或いは物故し

て減少の一路をたどっている。しかもなお一方には中国その他に残留を余儀なくされた日本人孤児の集団や、遺骨収集さえ完全にできないでいる辺地戦跡が少くない。沖縄等に見る「日の丸」や「君が代」に対する嫌悪拒否反応は、戦争を知らない世代にまで受け継がれて、日本民族の血の中に深い傷痕を残している。

戦後は容易に終わらないというのが現状であろう。

思えば国を愛し、己をすてて公の為に死することをいとわず、異郷に散っていった護国の精霊たちの犠牲によって今日の日本の平和がある。その人々の尊い命とその功を決して空しく歴史の中に葬り去ってはならない。この和讃を唱えることによってせめて精霊^{みたま}安かれと祈りを捧げると共に、さまざまな手段を重ねて彼らの労に報いる心を育てなければなるまい。後につづく人々の使命もまたここにあるのではなからうか。

追善供養和讃

成田 教淳 作詞
松濤 基 作曲

一、 弥陀みだのみ光

念ねんじつ

面影おもかげともに

懐なつかしみ

回向えこうささぐる

御供養おんくよう

み霊たまよここに

受け給たまえ

南無阿弥陀仏なむあみだぶつ

阿弥陀仏あみだぶつ

二、 今日けふの集つどいの

真心まごころを

ゆかりの我等われら

念仏ねんぶつの

回向えこうささぐる

御功德おんくどく

うけて蓮はちすに

おわしませ

南無阿弥陀仏なむあみだぶつ

阿弥陀仏あみだぶつ

三、 浄きよきみちびき

願ねがわくは

此世このよの務つとめ

日々ひびの業わざ

われら感謝かんしゃと

報恩ほうおんの

明るき世にぞ

なし給たまえ

南無阿弥陀仏なむあみだぶつ

阿弥陀仏あみだぶつ

先亡の御霊に対して、ゆかりの者たちが相集い、念仏回向して、感謝と報恩の念ともども供養する心を歌った和讃。われわれ残された者の念仏の功德により、御霊は安らかに極楽浄土の蓮台上に登って、この世のつとめと日々の仕事に精出すわれわれを護って下され、と願っているのである。

およそ一度死んだものは、二度と再び同じ姿ではこの世に戻ってこないのが、浮世の定めである。

しかし、宗教信仰の世界においては、御霊の輪廻転生が可能である。

浄土宗においては、回向^{えこう}、すなわち自己のなすところの善根功德を亡き人のために恵みめぐらし、衆生にも施与することによって、極楽往生ができる^{と説く}。

その回向に往相^{おうそう}と還相^{げんそう}の二がある。往相回向というのは、前記のようにして衆生とともに往生をとげんと

願うことであるが、還相回向というのは、浄土に生じた後、大悲心を起こしてこの穢土^{えど}に帰り、衆生を教化して共に仏道を成ぜんとすることである。

一般に死者のために読経念仏するのを回向というが、これはその功德を死者にさし向けて仏道に入らしめんがためである。

この和讃で、第三節に、感謝と報恩の明るい世の中にしたまえ、と願っているのは、まさに還相回向を請願した趣旨といえるだろう。お盆に際して祖先の霊を送り迎える「里帰り」の習俗にもその意味がこめられているのである。後れ先立つ世の習いの中で、娑婆に残されたわれわれが、一足先に往生された故人によって、目に見えぬ種々の擁護^{ようご}を受けていると信ずることが、そのまま還相回向のご利益につながるわけである。

二河白道和讃

高津 ときを 作詞
松濤 基 作曲

一、旅人一人

東より

進退ここに

谷まりて

八、勇気百倍 まっしぐら

西に向うに

大河あり

隣れ空しく

立ち竦む

歩み運べば 忽ちに

北は逆巻く

水の渦

心悲嘆に

沈む時

身は彼岸の 蓮の上

南は燃ゆる

火のほむら

波の間に間に

見え隠れ

あら有難の 浄土かな

二、深く底無く

辺り無く

白く輝く

一筋の

九、怒り貪り 愚かさの

水火こもこも

押寄せて

道の有るこそ

頼みなれ

三煩惱に 阻まれて

右も左も

荒れ狂う

東の岸に

声ありて

迷いの里を 出で難き

地獄の谷ぞ

恐ろしき

汝行くべし

進むべし

我等凡夫の 悲しさよ

三、後を見れば

群賊や

我は釈迦也

守護してぞ

十、衆生済度の 悲願より

野獣の群の

吠え迫る

必ず無事に

渡さなん

善導大師の 諭されし

前へ進むも

助からず

西の岸にも

声ありて

二河白道の 譬えこそ

後へ戻るも

亦死なり

極楽教主の

弥陀如来

頼みの綱と 云うべけれ

四、旅の疲れの

重き足

御手をさしのべ

励まして

踏出すべきか

然らずか

来れ来れと

招かるる

善導大師の有名な「二河譬」の教訓を、ほぼ忠実に和

讃化したもので、われわれ凡夫が、貪瞋痴の三煩惱に阻まれて容易にそこから脱け出せないでいる悲しみに対し、勇氣と決断を与えてくれる歌詞といえるだろう。

大師は、今から千三百年余前に、中国唐代に生まれ、永隆二年（六八一）に六十九歳でなくなった、浄土教の大成者である。種々の芸術的手法を凝らして念仏法門の弘通につとめ、『観経疏』以下五部九巻の著がある。わが宗祖法然上人は、その流れを継いで、「偏えに善導に依る」という教旨を立て、師を弥陀の化身と崇めて浄土宗を開いた。よって大師を「高祖」と仰ぐ。「二河白道」の譬えは、前記『観経疏』散善義に出ている話で、筋書きは歌のとおり、一人の旅人が、水火交々荒れ狂う二河の間に、東から西へ通じる一本の白道を行くことによって救われる、とするもの

である。

すなわち、凡夫は欲望や迷いの中、多くの異なった見解をもつ人々に妨げられながらも、阿弥陀仏の本願という他力の信仰を確保することによって、必ず浄土往生をとげることができる、と説く。「水」は貪り、「火」は怒り、「群賊や野獸」は人間の欲や煩惱などの迷妄を示す。「東の岸」は不安に満ちる娑婆であり、「西の岸」は安楽な極楽浄土をさす。

また、中央に見え隠れする「白く輝く一筋の道」こそ、阿弥陀仏の世界へ導く本願で、それを信じ歩みさえすれば、自ら願生心が生じて彼岸に往生できるのである。

ちなみに、釈迦・弥陀二尊が、それぞれ 東岸から「行け」と勧め、西岸から「来たれ」と招くものを、発遣来迎の儀として重んじる。

水子地蔵和讃

平野 孝順 作詞
松濤 基 作曲

一、親子おやこのえにし はかなくて

水子みずこのうちに この世よ去り

母の乳房ちぶさを さがしつつ

ひとり闇路やみじの 幼霊おさなごや

三、生命いのちのきづな したいつつ

蓮はちすの浄土じょうど いとおしや

香水かおりそそぎて 念仏ねんぶつを

称となうる心願こころに 感応こたえらる

二、救すくいのみ手を さしのべて

大慈大悲だいじだいひの 地蔵尊じぞうそん

あみだ如来にょらいの すがたかえ

育て導みちびく 最尊ほとけなり

四、救誓ちかいの筏いかだ あやまたず

弥陀みだの浄土じょうどへ 導みちびかん

南無なむや水子みずこの 地蔵尊じぞうそん

南無なむ阿弥陀仏あみだぶつ 阿弥陀仏あみだぶつ

いわゆる「水子」の霊を弔うために、大慈悲心の権化ともいべき地藏尊におすがりして、弥陀の浄土へ引導を願うという、供養和讃の一種。「水子」というのは、折角母の胎内に宿りながら、母親の身体の不調、胎児の異常、生活環境等のため、やむにやまれず、中絶ということになったり、流産または死産した幼き胎児の総称。

不思議な縁に結ばれて、結婚した夫婦の喜びは、やがて親となるべき大きな喜びに変っていく。しかし折角親子の縁が整い、胎児を身ごもりながら、産声を聞くこともなく「水子」の中に此の世を去って行く、幼い御霊を思う時、親の身になれば、断腸の悲しみである。母の乳房を求めつつ、闇路をさまようと聞けば、憐憫の情に、胸をかきむしられる思いがする。

水子供養が、はやることは決して望ましい現象ではない。しかし止むを得ぬ事情のために犯したこととは

いえ、幼い「生命」の芽をつむことがいかにいまわしい事態か、当事者に十二分に認識させる教育が必要であろう。ごく簡単に生んで、アッサリ捨てても、供養すれば救われる、というような安易な誤解がはびこることが、恐ろしい。

さればこそ「水子」といえども尊い生命体であることを忘れることなく、阿弥陀如来の化身である大慈悲の地藏尊のお救いにおすがりして、お導きを願う心が大切である。

子を思う真実の親心にめざめることが、地藏菩薩の救済の心である。



成道和讃

辻村 玄瑞 作詞
曾我 晃也 作曲

一、ヒマラヤの峰 雪白く

三、ニルワナの星 輝きて

尼連禪河の 水清し

師走八日の 朝まだき

釈迦牟尼世尊は 六年の

南無仏の声 高らかに

苦行を捨てて 草を踏む

仏陀となられし 尊さよ

二、決意も固く 金剛座

四、ああ大聖の 大悲願

降魔の利剣 ふるいつつ

世のみ光と 輝きぬ

求道の心 ひとすじに

讃えまつらん おん悟り

四十と九日の おん思惟

讃えまつらん 成道会

この和讃は、釈尊成道前後の模様とその慶びを叙し、成道会を讃仰する趣旨で作られたものである。

釈尊は、勤苦六年の後、ブツダガヤーのアッサッタ樹という一種のイチジクの木の下に座し、四十九日の間、種々の悪魔と闘いながら思索を続けられた。そして、ついに十二月八日、暁の明星が輝く頃、いわゆる仏陀としてのさとりを開かれた。これを成道といい、アッサッタ樹のことを、後世、「菩提樹」と呼び習わすようになった、と伝えられる。

「尼連禪河」は、ガンジス河の支流で、ネーランジヤラーという。ウルベーラ地方のセーナー村付近を流れていて、釈尊の苦行された林もそばにあったようである。「金剛座」は、金剛石のように堅固な宝座。釈尊は、ムンジャ草という柔らかな乾草を敷いた座所で、目的達成までは決してこの座を立つまいという堅い決

意を秘めて思念をこらした。故にこの名がある。

「おん思惟」は精神統一をこらして禪定による思索と観察を行うこと。

「ニルワナ」はニルヴァーナ、つまり涅槃と同義であるが、ここでは、煩惱や迷いの消えた、永遠の安らぎ（さとり）の境地に達したことを意味して、星の光を形容したものであろう。

「成道会」は、臘八会ともいい、毎年十二月八日を釈尊のさとりの日として行う法会をさす。宗派や寺院によっては、釈尊苦行明けの故事（村娘スジャータの供養）にちなんで、この日、牛乳やお粥などを参詣者にふるまったり、悪魔払いの寸劇を行ったりして、当時（B・C四三〇年頃）を偲ぶところもあるようである。

五重和讃

池上 靈心 作詞
松濤 基 作曲

宿善開発

二重

四重

一、不思議な縁に

むすばれて

三、三心四修に

五種正行

五、たとえ火の海 猛る水

昨日に変わる

我がすがた

三種行儀も

ことごとく

あれどひたすら 南無阿弥陀

ま白き衣に

身をつつみ

南無阿弥陀仏の

声の中

申す許りを つとめて

五重法会の

筵に会う

こもりて浄土に

生まれゆく

浄きみ国に 生まれゆく

初重

三重

第五重

二、罪・やみ・なやみ

果てしなく

四、修行の道は

数あれど

六、己が計らい 打ちすてて

三つの汚れに

身をまかせ

思いわづらう

こともなく

唯み心に したがいば

今日を楽しむ

愚かさに

南無阿弥陀仏

ひとすじに

お慈悲の中は 春日和

気づかせ給う

親ごころ

ほとけまかせの

身の安さ

南無阿弥陀仏 阿弥陀仏

五重相伝の初重から五重に至るまでの、それぞれの意義を歌おうとしたもの。

「五重法会」は、浄土宗の奥義を五種五段階に類別して伝え、機・法・解・証・信という五通りの血脈を授ける、大切な儀式法会。現在、在俗の信者を対象として各寺で行われるのを、化他五重、結縁五重などという。行者は期間中、「白き衣」に身を包むのが普通である。書伝（三巻七書）と口伝（口授五十五箇条）とがある。

「三心四修」とは、浄土宗安心の眼目として至誠心・深信・回向発願心の三を三心、同じく作業の姿として恭敬修・無余修・無間修・長時修の四を四修という。

「五種正行」は、念仏行者の実践上における五つの要目で、五種雑行に対す。浄土正依の經典を読誦し、阿弥陀仏の浄土の莊嚴を想念觀察し、阿弥陀仏を礼拝

し、専らその名号を称名し、その仏徳を讃歎供養すること。この内、第四称名正行を正定業、他の四正行を助業と名づける。「三種行儀」は、念仏行者の行うべき三種の称名方軌で、尋常・別時・臨終の三行儀をいう。尋常行儀が正行、他は傍行であることはいうまでもない。

ちなみに、五重とは浄土宗の宗意安心の奥義を授ける伝法様式で、応永十年（一四〇三）、江戸伝通院を建てた浄土宗第七祖了譽聖岡上人が伝法目録を作った。いわば信根培養の特別研修会を組織化したようなもので、門弟の第八祖西譽聖聰上人（増上寺開山）が初めてこれを授かっている。五重を相伝した受者には、戒名の中に「誉号」という特別の榮譽称が与えられる習慣も、ここから生まれた。

涅槃和讃

高津ときを 作詞
曾我 晃也 作曲

一、 拘尸那城外
クシナジョウガイ

四、 人天有情ら
にんでんうじょう

七、 ああ大聖の 御舍利は
だいしやう おんしゃり

沙羅の林の
サーラ はやし

草木虫魚に
そうもくちゆうぎよ

分衛の塔に 納まりつ
ぶんね たう おさ

教化の道の
きやうけ みち

嗚咽の声は
おえつ こえ

その遺教は 永久に
ゆいきやう とこしえ

世尊は旅に
せそんたび

悲嘆の涙
ひたん なみだ

法の光と 照りわたる
のり ひかり

二、 双樹の陰に
そうじゆかげ

五、 跋提河の
ばつだいがわ

八、 南無や大悲の 釈迦如来
なむ だいひ しやかにらい

頭を北の
こうへきた

無常の風の
むじやう かぜ

五濁の悪世 みそなわし
ごじよく あくせ

長老迦葉
ちやうろうかしやう

鶴の林の
つる はやし

闇路に迷う 我等をば
やみじ まよ われら

早や入滅の
はにうめつ

輪廻の相を
りんね そう

めざめの岸に 召し給え
きし め たま

三、 度すべき者を
ど ぶきもの

六、 金棺すでに
きんかん

南無阿弥陀仏 阿弥陀仏
なむ あみだぶつ あみだぶつ

精進せよの
しやうじん

二月十五の
にがつじゅうご

南無阿弥陀仏 阿弥陀仏
なむ あみだぶつ あみだぶつ

常随阿難に
じやうずい あなん

荼毘の煙は
だび けむり

南無阿弥陀仏 阿弥陀仏
なむ あみだぶつ あみだぶつ

世寿八十の
せいじゆはちじゆ

峰はるかなる
みね

（九小節目以降の旋律にて）

釈尊が旅に病んで入滅、大涅槃に入りたまう前後の光景を中心として、歌謡的に描写し、その遺教の尊さを讃仰したもの。

伝道の旅を続けること、およそ四十五年、多くの弟子を率いて、故郷に近いクシナーラ（拘尸那羅）という町に着いた釈尊は、疲労と下痢のため衰弱しながら、サーラ（沙羅）の林の「双樹」の陰に床を敷き、頭を北にして西向きに横臥された。八十歳の老齢であった。サーラ樹は、インドの重要な森林植物の一つで、常緑高木。釈尊涅槃のとき、鶴の羽根を広げたように白く変わって枯れはてたので鶴林とも「鶴の林」ともいう。

釈尊は、入滅を予言して側近のアーナンダ（阿難）を通じ、いろいろな指示や教訓を与えられたが、葬儀については比丘の仕事でないとし、在家信者たちに任すべしと厳命された。

いよいよ入滅の近づいた時、弟子中の最長老である大迦葉（長老迦葉）は、あいにく遠出の遊行に出ていて、急ぎクシナーラへ向かっていたが、遂に臨終には間に合わなかった。しかし、釈尊は「度すべき者」すなわち済度教化すべき人々はすべて「度し終え」たと満足裡に「大涅槃」をとげられた。アーナンダが遺骸を荼毘に付そうとしたが、なぜか、薪に火がつかない。そのうち大迦葉一行が、やっと到着、遺体をマッラー族の廟である天冠寺（ナクタバンダナ）に移して荼毘にした。

「人天有情」はすべての生あるもの、「五十二衆」は五十二類の人々、「分衛の塔」は滅後、生前有縁の八ヶ所に舍利を配り、灰を二ヶ所に分けた十塔のことをいう。

後世、アショーカ王は、これらを再分配して全インドに八万四千の舍利塔を建て、祀ったと伝えられる。

法然上人生誕和讃

伊達 亮芝 作詞
松濤 基 作曲

一、色は匂^{にお}えど 散りゆくを

二、梢^{こすえ}にのこる くれないの

三、身を粉^{こな}にして 帰命^{きみょう}せん

照らしてやまぬ み仏の

仏の心 そめぬいて

うきことつらき 人の世に

曇^{くも}る間^まもなき 月のかげ

不捨^{ふしゃ}のいのちの そのままに

ただひたすらに 仏行^{ぶつぎょう}を

心に澄^すみて 手をあわす

身にいただくを 謝^{しや}しまつる

八十年^{やそとし}かけて みな人に

おしえ示^あして 生^いれましぬ

おしえ垂^たれんと 出^いでましし

おしえ捧^{たも}げて 生^いきましし

法然上人 思^{おも}うかな

法然上人 とうとしな

法然上人 したわしな

生誕^{せいたん} 八百五十年

生誕 八百五十年

生誕 八百五十年

上人のお生まれになったのは、平安朝の末、長承二ちようしやう

年（一一三三）四月七日で、昭和五十七年（一九八

二）は正しく八百五十年目に正当する。浄土宗では、

これを記念して、総大本山はじめ各寺院悉く慶讃の法

要その他、各種記念行事や催事を実施、大いに祖徳顕

彰、報恩謝徳の行を営んだことは、まだ記憶に新しい

ところである。

一化八十年にわたる上人の生涯は、求道僧としての

四十三歳までと、専修念仏の教化僧としての八十歳ま

でに分かれるが、その「いのち」は、八百五十年を経

た今日はおろか、未来永劫に生きる凡入報土の光とし

て輝くことであろう。その廣大無辺な恩恵に生かされ

るわれわれは、あらためて上人お誕生の意義を深く尊

く噛みしめなければなるまい。この和讃も、その意味

で、上人出世の喜びとその教えへの感謝を込めて作詞

されたことはいうまでもない。

第一節では、無常の世を照らす月影のように、手を

合わせて弥陀を頼む人の心のすみずみまで慈悲の光の

及ぶことを教えて下さった上人の御徳を讃仰している。

第二節では、凡夫の誰もが漏れなく救われるという

教えのありがたさに感謝して、上人を尊崇する気持ち

を歌っている。

第三節では、八十年の生涯をかけて、煩惱の渦巻く

人生に、ただひたすら念仏

だけで救われる道を示して

下さった上人に対し、身を

粉にしても帰仰せんとの強

い決意と信心を披瀝してい

る。



入（退）堂和讃

入堂和讃

一、清らなる法水^{みず} 四方^{よも}にふり

蓮^{はちす}の散華 天^{そら}に舞う

法鼓は高く 鳴りひびき

莊嚴すでに 備われり

諸人^{もろびと}共に 掌^てを合せ

今法筵^{ほうえん}の 時^{とき}いたる

二、ゆらぐ香煙^{こうえん} 天^{そら}に満ち

あけきみあかし 地を照らす

喚鐘^{かんしょう}すでに 高鳴りて

聖衆^{しょうじゆ}静かに 入り給う

諸人^{もろびと}共に 掌^てを合せ

今法筵^{ほうえん}の 時^{とき}いたる

南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏

退堂和讃

一、極楽浄土 そのままに

梵唄^{ぼんばい}の声 厳かに

仏の教え とりつぎし

法筵^{ほうえん}すでに 静まれり

諸人^{もろびと}共に 掌^てを合せ

此の法悦^{ほうえつ}を 謝しまつる

二、法会^{ほうえ}の幕は 今^お降りて

式会^{しきえ}の聖衆^{しょうじゆ} 去り給う

仏の教え 明日の日の

生活^{くらし}に生かす 喜びを

諸人^{もろびと}共に 掌^てを合せ

念仏となえて 謝しまつる

南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏

菊地 謙雄 作詞
曾我 晃也 作曲

法要の際、式衆、すなわちそれに参加して法儀を営む僧たちが、道場に入るのを入堂または昇堂あどといい、同じく退去することを退堂または下堂あどという。入堂和讃は一切の準備が整って式衆の入場を待つばかりの様子を、また退堂和讃は法要が済んで一同が退いた後の模様を、それぞれの感動とともに謠い上げたものである。歌詞は別々であるが、曲節は同じであるから、両者をまとめて解説する。

入堂和讃の冒頭、「清らなる法水」というのは、道場洒水しやすいのこと。「蓮の散華」とは、道場散華のこと。

「莊嚴すでに備われり」とは、法要開始の合図である太鼓や鐘も鳴り、道場には香煙がゆらぎ明るい灯火がともされて、供物その他も万端飾りつけ終わったことを示す。参詣の諸人も掌を合わせて、式衆の入場を今や遅しと静かに待っている。こうして「法筵」つまり

法会の始まる時が来るわけである。

退堂和讃にある「梵唄ぼんばい」とは、いわゆる声明と同じく、偈文などを節づけで諷詠することであるが、衆僧の唱和する声調は、まことにありがたく、「極楽浄土そのまま」といつても過言ではあるまい。

参詣の大衆は、この盛儀をまのあたり見聞して、法筵の終わった後も、なおその「法悦」の余韻を噛みしめ、み仏の教えを明日への生活の糧として感謝する心を養うべきである。

ちなみに、学問や技艺が奥義に達することを「堂に入る」というが、昔も今も、特にみ仏の安置された御堂はそれだけの尊厳性をもつ神聖な場所であり、したがって入（退）堂にも文字どおりの真剣さと敬虔さが要求されるわけである。

三上人遠忌和讃

宮本 孝学 作詞
松濤 基 作曲

一、宗祖 法然上人の 流れ正しき 法灯を

西 鎮西に 赫々と 専修念仏 顕正す

聖 尊し 仰ぐかな

二祖聖光上人の 遠忌七百五十年

二、石見の国を 出でまして 遠く東国 一円に

浄土のみより 宣べ給う 燃ゆる信火の 著書あまた

聖 尊し 仰ぐかな

三祖良忠上人の 遠忌正当七百年

三、常随給仕 十八年 影の形に 添うるごと

知恩報恩 ひとすじに 祖師のみあとは ゆるぎなし

聖 尊し 仰ぐかな

源智上人勢観房 遠忌七百五十年

三上人とは、いうまでもなく、浄土宗第二祖聖光上人（鎮西）、同第三祖良忠上人（記主）並びに知恩院第二代源智上人（勢観房）のお三方をさす。歌詞にもあるように、二祖と源智の両上人は七百五十年、三祖は七百年の正当を迎えるので、浄土一宗では、全宗挙げて記念の遠忌法要その他、種々の行事を催し遺徳顕彰に努めたのである（昭和六十二年）。

本文第一節では、二祖が宗祖法然上人の正しい法灯を受け継いで九州方面に破邪顕正の教線を敷かれた業績を讃仰、第二節では、三祖が、生国「石見の国」（島根県）を出てから遠く千葉・鎌倉など関東一帯を巡錫し、数多くの著述（報夢鈔、五十余帖という）を残して浄土の教えを広められた芳躅を偲び尊んでいる。また、第三節では、源智が宗祖の側近に侍って「常随給仕十八年」、よく報恩の誠を捧げた実績を評価、そ

の徳光を讃える詞となっている。

このうち、「法然上人の流れ正しき」とわざわざ歌うのは、当時、門弟の中でいろいろの異流や邪義が統出して、誰が果たして正統な法然教義の継承者であるかさえ明確でなかった。それを聖光上人が特に「鎮西流」という形で正しく伝え広められた点を「顕正す」と評価したのである。

また、源智が「知恩報恩ひとすじに」尽くした具体的な功績は、嘉禄の法難で破壊された法然上人の廟堂を修復して知恩院を再興したこと、そして師の化物利生の精神を継いで三尺の弥陀像を造立、その胎内に念仏勧進して集めた五万人の結縁交名帳を納めた報恩行をさす。

いけらば念仏和讃

いけらば念仏の 功つもり

死なば浄土へ まいりなん

とてもかくても 此の身には

思いわずろう 事ぞなき

と 思いぬれば

死生ししょう共に わずらいなし

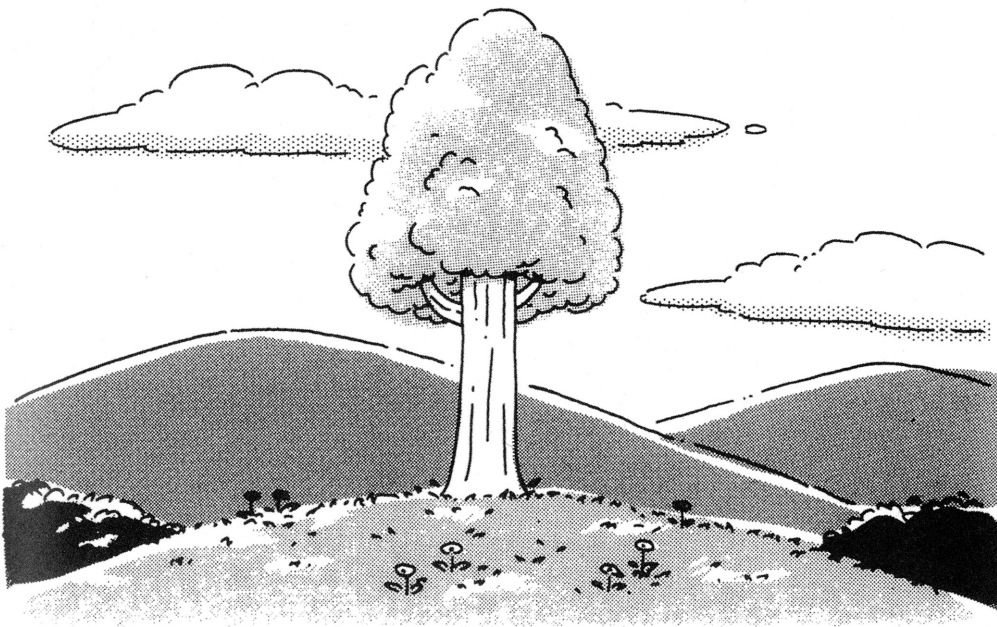
南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏



法然上人御作
松濤基作曲

法然上人の詠歌中、唯一の今様歌である。当時は、後白河法皇はじめ身分を問わず歌舞音曲としての今様に熱中した時代で、その大要は法皇御撰の『梁塵秘抄』に収録されている。上人が、これらの世相について語られる時、自ら口をついて出てきたのが、人生観としての念仏相続の必要性であり、巧まらずして七五調の一句となったのかもしれない。

『勅伝』巻二十八には、上人が「死なば往生疑わず」として弟子の禪勝房に授け、「と心得てねんごろに念仏して畢命を期とせよ」とつづけて諭された旨を伝えるが、同巻二十一には、「常に仰せられける御詞」の一つとして出し、「と思ひぬれば死生ともにわづらいなし」と結んでいる。

いずれにせよ、念仏行者としての心得を、口調よく、すらすらと明瞭に示されており、「こころ」の時代を

渴望して生きる今日の大衆にも、日常生活を鼓舞するに足る永遠の指針となるべき、リズムあるご法語であるといえよう。

世に体験ほど強く人を説得するものはない。法然上人は、一化八十年、生きるも死ぬも、専ら永遠の生命（無量寿）のはたらきにまかせ、小さき己れの関するところではない、と悟って「ただ一向に念仏すべし」との信念を貫かれた。そしてその貴重な体験を通して、念仏相続こそ「死生ともにわづらいなし」の秘訣であると教えられたのであるから、まことに尊くありがたい極みである。

ただ、他の多くの一般的今様歌同様、節をつけて歌われたものかどうかは、定かでなく、現行の詠讃歌としては、もちろん新しく曲づけされたものであることは言うまでもない。

三宝和讃

吉田 祐倫 作詞
松濤 基 作曲

一、十方世界のみ仏を 心にいだき念じつつ

波風荒き人の世に 今日を明るく生きゆかん
今日を明るく生きゆかん 一心敬礼常住いつしんきやうらいじょうじゅうぶつ仏

二、釈迦の説かれしみ教えを 心に深く刻みつつ
波風荒き人の世に 今日を正しく生きゆかん
今日を正しく生きゆかん 一心敬礼常住ほう法

三、和合の仲間手をつなぎ 清き社会を求めつつ
波風荒き人の世に 今日を仲よく生きゆかん
今日を仲よく生きゆかん 一心敬礼常住そ僧

吉水流詠唱の「吉水講信条」は「私たちはこの詠唱を通じ、一、篤く三宝を敬い、仏祖の恩徳に報います」から始まる。また、通常の法要や日常勤行の経文で、この「三宝礼」を香偈の次の二番目にお唱えする。

そして三宝和讃は、この「三宝礼」の偈文を各章節の末尾に折込んで構成されている。「三宝礼」をごく平易な文に訳すと「私たちはいつ、いかなる所でも常にましますみ仏に心からの礼拝を捧げます。私たちはいつ、いかなる所でも仏法や念仏の教えに心からの礼拝を捧げます。私たちはいつ、いかなる所でも仏法や念仏の教えを信じ、伝える信仰の仲間^{おとも}に心からの礼拝を捧げます」という意味になる。

つまり、「三宝」とは仏・法（仏教の教え）・僧（教えを受けて修行する集団、サンガ）をいい、三宝を敬い、私たちの心の支えとして帰依することは、仏教徒

としての基本となっている。

宝とは世の中に数少なく希少価値を有するものをさすが、火災に遭えば焼け、やがていつかは壊れて消失する。それら世にいう物質的宝に対し、「三宝」は精神的宝で、永遠に消失しない不滅のもの、「本当の宝」であろう。真の仏教徒は「これをしっかり身に付けよ」と釈尊はお説きになられている。

さらに、仏を尊ぶ心の中心には、ひたすら仏を求める念仏があるのだから、「三宝」は念仏の中に包み込まれてゆくだろう。だから、「三宝」が「本当の宝」であれば、「念仏」は宝の中の宝ということである。

とかく波風が荒い人の世を、絶えず希望をもって、明るく、正しく、仲よく乗り切りましょうというのが、三宝和讃の歌詞の意味するところである。

西誉上人鑽仰和讃

高津 ときを 作詞
横山 菁 児 作曲

一、草創ここに六百歳 輝く法灯伝持して

光あまねく増上寺 開山西誉上人の

薫りも高き学徳を 仰ぎ讃えん大遠忌

三、正義宣布の火は燃えて 著すところ二十余部

巻も積もりて百五十 浄土八祖の晴れの座に

英才学僧集い来て 教団の基礎ついに成る

二、千葉家の館に生まれ出で 仏の縁に護られて

幼くたどる法の道 念仏宗派中興の

問師に受けし奥義こそ 五重の秘脈化他の伝

四、人心荒ぶ乱世に 済度の雨を降らせつつ

化縁の薪尽きてより いまに五百と五十年

み跡慕いて縁山に 報恩の風日々新た

一、西譽聖聰上人の生まれと出家

貞治五年（一三六六）七月十日、千葉氏胤うじたねの次男として誕生。母君は新田義貞の娘であるが、義貞が黒山城攻めの時、流矢に当たって死亡、一族も南朝のために亡ぼされたため、一族の菩提を弔うために、両親は僅か九歳の徳寿丸（上人の幼名）を千葉氏の菩提寺である千葉寺に入れて出家させ、密教を学ばせたという。

なお千葉寺は奈良時代からの古刹であるが、衰微していたのを源頼朝の命によって、千葉常胤が再興し、以来千葉家代々の祈願寺として一族が帰依していた。

二、問師（聖岡上人）に導かれて

問師は当時隆盛を極めていた禅宗に対して浄土念仏の教えを極めて、念仏の実義を明らかにしこれを広めることに心魂を注がれていた。

たまたま十五歳の時、聖聰は問師の講話に感動して、真言宗を捨ててその門下に入り、浄土宗の法門を研鑽

した結果、師の問師から厚い信頼を受け、念仏の奥義である五重伝法の全てを伝授された。現在行われている五重相伝の基礎ができ上がったのである。「問師に受けし奥義こそ、五重の秘脈化他の伝」と和讃にあるのはこのことを言うのである。

三、上人のご功績

弱冠二十八歳にして（明徳四年―一三九三）増上寺を開創され、多くの学僧を育てる一方では、積極的に布教に専念し、二十六部、百五十巻もの貴重な著作を残されている。

問師と西譽上人の時代は、浄土念仏の各派が乱立していたため、浄土宗は寓宗ぐうしゅうと蔑さげすまれていたが、お二人によって初めて教団として天下に認められるようになった。浄土宗中興上人と崇あがめられる所以である。因ちよみに問師は浄土宗第七祖、上人は第八祖である。

慶 祝 和 讃

吉田 祐倫 作詞
松濤 基 作曲

一、今日の佳よき日のおとずれて

空に舞いとぶ 花吹雪

弥陀のみ光 身に受けて

ともに祝わん 慶よろこ事を

ともに祝わん 慶よろこ事を

三、今日を寿ことほぐ 鐘ひびき

境にわ内面もに映はえる 綾紅葉あやもみじ

永遠とわに栄えん 仏の子

ともに祝わん 慶よろこ事を

ともに祝わん 慶よろこ事を

二、今日の慶よろこび

松の緑の いよよ濃し

心しずかに 掌てを合わせ

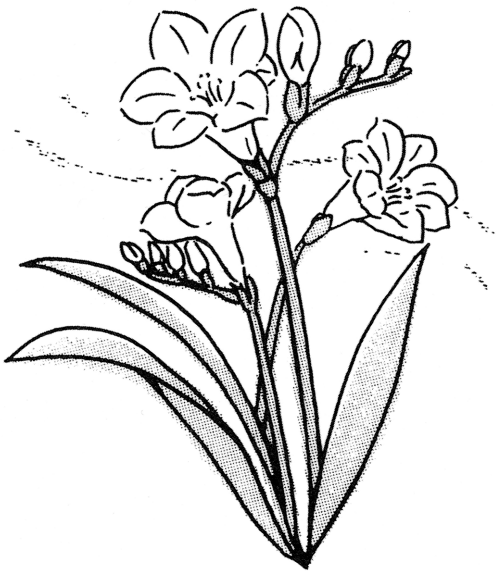
ともに祝わん 慶よろこ事を

ともに祝わん 慶よろこ事を

南無阿弥陀仏 阿弥陀仏
南無阿弥陀仏 阿弥陀仏

この「慶祝和讃」は解説するまでもなく、お祝いの歌である。各寺院では落慶式・晋山式・仏前結婚式などにお唱えするのがよい。また、何周年記念などの記念式典や行事の時、翻ひるがへって国民の祝日にも機会があれば、お唱えしてもよいだろう。

そして、言うまでもなく、何よりも祝意や喜びの気持を込めてお唱えするのが肝要かんようである。



献燈（香・花）和讃

水口 正宏 作詞
松濤 基 作曲

一、燈明^{あかり} 献^{ささ}げて みほとけに

紫金^{しこん}の色^{いろ}と 輝^{きら}けり

その威光^{みひかり}を 蒙^{こうむ}るは

ただ念仏に よりてこそ

三、花^{はな}を 献^{ささ}げて みほとけに

笑^えみて真如^{しんにょ}の 色映^{いろは}える

その大慈悲^{みめぐみ}を 蒙^{こうむ}るは

ただ念仏に よりてこそ

二、香^かを 献^{ささ}げて みほとけに

薰煙^{かおり}は四方^{よも}に たなびきぬ

その信心^{まことこころ}を 蒙^{こうむ}るは

ただ念仏に よりてこそ

法要儀式を行う道場を飾り調え、仏前に香華・燈燭・靈供茶菓を献ずることを「仏前莊嚴」という。通常は法儀開始前に行われるが、法要の中で恭敬礼拝して崇敬な心でねんごろに供え捧げる際の和讃である。

仏・法・僧の三宝をはじめ、亡者の霊などに対して供物を供給してこれを資養する行為を供養というが、仏教以前の古代インドでは、動物を犠牲として神に捧げる宗教儀式があった。釈尊は不殺生の立場から、動物供儀の祭祀を戒め、慈悲行として象徴的行為に浄化させたもので、その供物のまとめかたによって数種の供養が經典に説かれている。そのほとんどに共通しているのが、香華・燈明・飲食などである。

燈明は、暗闇を照らすことから智慧の光にたとえられ、仏の教えの意で法燈ともよばれる。浄土宗では、あらゆる世界をもれなく照らす阿弥陀如来の光明にほかならない。

香も法要や行事に欠かせないもので、用い方によって塗香と焼香に分けられる。線香は焼香を簡便にしたものと考えてよい。香炉から立ち上る香煙は、仏法のつかいにたとえられ、餓鬼さえも薫じた香のかおりだけは嗅ぐことができる信じられている。

仏前に花を捧げることを供華（花）といい、中世以降、花の季節にとくに行事化された例もある。常には季節の色花を端正に調え、正面を衆生の側に向けて供えるが、自然のありのままの姿を道場内にかもしだすところから、仏の慈悲にたとえられている。

「真如」とは真理と同じ意味で、真実でその実体が変わらないことをいう。とくに蓮は、泥中に汚されることなく咲く最も神秘的な清浄な花とされて、仏の在せる極楽浄土さながらの世界が現出される。

施 餓 鬼 和 讃

水口 正宏 作詞
松濤 基 作曲

一、 常随多聞の 阿難尊者

樹下瞑想の 夜更け時

焰口の餓鬼が 現われて

三日の命と 告げ消えぬ

二、 少飲食をば ほどこして

変食陀羅尼 呪えよと

共に生かされ 共に生く

世尊の教え 利他の行

三、 欲心果てなき 餓鬼道に

人間の心は 生き写し

諸人共に 惻隠んで

五福を招く 大法会

五如来無量寿 甘露王

南無阿弥陀仏 阿弥陀仏

衆生が自らつくった業によって生死を繰り返す六つの世界（六道輪廻）のうち、とくに地獄・餓鬼・畜生を三悪道（三悪趣）とか三途ともいう。施餓鬼会は、餓鬼道に苦しむ一切の衆生に、飲食を施して供養する法会で施食会ともいい、期日は特に定めないが、お盆やその前後に行われることが多い仏教行事である。

一般に、餓鬼は供養するもののない無縁仏とか、祀るものがない霊魂として觀念されたので、先祖の精霊を祀る盂蘭盆会に、餓鬼に施食する功德で亡き人の滅罪追福を祈願するために修せられるようになった。その由来と典拠は、如来大慈の心から生まれたもので、『救拔焰口餓鬼陀羅尼經』とされている。

釈尊のいとこで長く侍者としてつかえ、説法を聴聞することがとくに多かった十大弟子の一人・阿難尊者をして、「一搏（掌にのる程度の）食を以て、呪を誦して之を施さしむ」とある。

施餓鬼壇には「五如来」を本尊として、宝勝・妙色身・甘露王・広博身・離怖畏如来の幡を懸けるが、中央の「甘露王如来」は西方無量寿仏であり、水向け供養する浄の水は一切の餓鬼を清涼にし、煩惱の火を消し止める功德がある。

「五福」とは、一般には福德寿命、つまり〈延命長寿・富・無病康寧・徳を楽しむ・子孫繁栄など〉をさす。

導師がこの法要の意義をのべる宣疏の一節に「慈仁惻隠して…」とあり、参詣者自身の福德延寿もあわせ願う。同じ地球上に、飢餓の地域もあれば飽食の国もあって、どちらが餓鬼かわからない現代に生きる私たち自身を憐れみ戒める心でお念仏を称え、自他ともに救われる功德を積みたい。

授戒和讃

池上 靈心 作詞
松濤 基 作曲

一、悪しきはすべて 為す勿れ
善き事広く 行ずべし
自ら心を 浄くせば
己のよるべ 己なり

— 七仏通誡の偈 —

二、人皆必ず み仏と
なるべき性を 具するなり
三つの宝を 光とし
至心に懺悔 致すべし

— 開導・三帰・請師・懺悔 —

三、菩提の心 雄々しくて
四つの誓を なし遂げぬ
七つの障り 更になく
正に授戒の 時到来

— 発心・問遮 —

四、衆生 仏戒を受けぬれば
即ち諸仏の 位に入る
位 大覺に同じ已りなば
真に是 諸仏のみ子なり

— 正授戒 —

五、戒を保持せば 自ら
なすべからざる 道は閉じ
なすべき行く手 開かれて
仏の願に かなうなり

— 証明・現相・説相・広願 —

六、つつしみ励み たゆみなく
念仏の声に 身をまかせ
仏への道 つとめなん
なむあみだぶつ 阿弥陀仏

— 勸持・念戒一致 —

浄土宗においては、五重相伝と授戒会を、鳥の両翼車の両輪とし、一番大事な念仏教化の道として勧められている。法然上人は開宗以後も授戒に励まれ、選擇集をお書きになった頃まで、厳しく戒を守られたと教えられている。

戒定慧の三学が仏教の基盤であるため、浄土宗においても戒の問題が大事である。専門の知識もないままに、自坊において授戒会の勧誡を勤め、その内容をまとめたのが授戒和讃である。

「仏教とは何ぞ」という白楽天の問いに対し、道林禪師が「諸惡莫作 衆善奉行 自淨其意 是諸佛教」と答えられたのは有名な話である。

ここから「人間のふみ行うべき道」が説かれている。浄土宗においては妙樂大師の授菩薩戒儀により、「人間のふみ行うべき道」を教えている。尊い念仏の教に甘えることなく、己れに厳しく授戒会を勧めていただくことを祈念する。

○七仏通誡之偈 諸惡莫作 衆善奉行

自淨 其意 是諸佛教

○授菩薩戒儀 内容から十二門戒儀ともいい「人間が人間としてふみ行うべき道」である。

1開導 2三帰 3請師 4懺悔 5發心 6問遮
7授戒 8証明 9現相 10説相 11広願 12勸持

○授戒の内容は三聚淨戒（1摂律儀戒 2摂善法戒 3摂衆生戒）であり「衆生佛戒を受けぬれば即ち諸佛の位に入る。位大覺に同じ已りなば真に是れ諸佛の子なり」と教えられている。

○四つの誓 衆生無辺誓願度 煩惱無辺誓願断 法門無尽誓願知 無上菩提誓願証 度断知証の四つの誓いである。

○七つの障り（問遮） 1佛身より血を出す 2父を殺す 3母を殺す 4和上を殺す 5阿闍梨を殺す 6羯磨僧を破す 7聖人を殺す 以上七つの罪の障りである。

吞龍上人和讃

齊藤 耕善 作詞
松濤 基 作曲

- 一、武蔵の国に 生うけし
稀有けうの高僧 名は吞龍
弥陀の本願 意いに留とめて
称名念仏 一すじに
- 二、説き弘めたる 尊さよ
干魃かんぱつ飢饉ききんに 泣く邨むらの
諸人もろびとたちを 励はげましつ
高声念仏 百万遍
天まで届けと 唱となうれば
龍神めぐみの 雨降らす
貧しき者も 病む人も
心康やすらぎ 徳したう
されど上人 巡錫じゆんしやくの
杖をたよりに 旅ごろも
念仏行脚 今いづこ
- 三、
- 四、やがて帰かえれば 天下てんか人
家康公の 請こいを承うけ
上野新田に 由緒ゆかりある
大光院を 建てたれば
檀林となり 僧集つどう
大光院の 門前に
時折り哀れ 捨て児あり
上人あわ憐れみ 抱きあげて
慈父のごとくにはぐくめば
子育て吞龍と 崇あがめらる
慈恩を受けし 子らはみな
上人仰ぎて 共どもに
専修念仏 一行いちぎやうに
励はげみはげみて 名をなせり
南無阿弥陀仏 阿弥陀仏
- 五、
- 六、

上人は弘治二年（一五五六）武蔵国（現埼玉県春日部市）一之割村の武家に生まれ、永禄十二年（一五六八）十四歳の時林西寺（当時は大善寺と号す）第八世岌弁上人に就いて得度。後に増上寺中興十二世源誉存応上人（普光観智国師）に就いて宗脉、付法を授かり師籍に帰って林西寺第九世中興となる。爾来十七年間、只管ひたすら選択本願の称名念仏を一筋に説き弘め、聴聞の信者多勢の信望を一身に集める。

その間干魃飢饉に泣く人々の訴えに心を痛め、仏天の加持、念仏の功德広大無辺なる事を示現せんと、高声不断念仏百万遍を唱え修したところ、慈雨にわか俄かに降り、田畑たちま忽ち潤うるおう。是のようにして吞龍上人の行業人徳は関東一円に喧伝され、諸州より要請を受けて巡教に出る。そして各地に寺院を開き漸ようやく帰山したところ、家康公の招きを受け、種々法問に明解な応答をして表彰され、学問料にと五十石を下賜された。

やがて入府した家康公は先祖新田義重公の菩提所として上野新田（現群馬県太田市金山町）に義重山大光院を建立し、信任篤い吞龍上人を開山一世に推挙・上人もこれを受諾した。その後家康公は屢々しばしば同寺を訪問。上人を鑽仰し教えを乞う所化の多くあるのを見て檀林に取り立て門前に所化寮を建てたので、関東各地より修学僧が雲集し研鑽に励んだ。

ところがある時、村の少年が父親の病気を治したい思いから禁制の鶴を捕獲して役人に追われて大光院に助けを求めに來たので、これを弟子にして密かに赤城山に隠棲したり、門前に捨て児がある度にこれを拾い上げて立派に薫育したので、いつともなく『子育て吞龍』と崇めあがられるようになり、然も皆付法伝授大成されたのでその事を賛えて作詞したものである。

第二版 あとがき

昭和六十二年、和讃解説書の要望に応える為、宝田正道先生を煩わして、既刊和讃二十四曲の解説書の刊行をみた。その時の宝田先生のあとがきに、

吉水流詠唱委員会からの依頼により、多くの現行作品の中から選ばれた二十四曲について解説することになった。大田秀三総長（当時教学局長）からの正式依頼状は、九月二十四日付で、十二月初旬に開催予定の詠唱委員会に間に合わせてほしい、と希望してきた。各曲四百字二枚程度の規定であるが、正味二カ月余りの期間に四、五十枚を執筆するには、どうしても十分推敲する時間が足らず、勢い拙速に陥らざるを得なかった。お詫びしておく。

さて、二十四曲はほとんど松濤基氏作曲であるが、故曾我晃也氏のものも四曲混じっている。作詞者は大部分が現代人であるが、無能上人、恵心僧都の作が各一、作者不詳の古讃も二作含まれている。

そこで概ね次のような解説方針で臨むことにした。

まず、作曲・作詞者の紹介は、特別の人を除いて省略、古讃に

ついでに詮策にも手をつけず、もっぱら作品内容、特にその中で難解と思われる仏教語句を中心として説明を加えた。ただ、歌詞が比較的単純でやさしく、一々の語を解説する必要なしと認めたものについてはスペースのバランス上、八百字という規定の範囲内で、その作品の訴える法話的要素などを述べておいた。参考にしていたできれば幸いである。

昭和六十二年成道会を前に

とあり、その解説書は平成二年三月二十九日に、発行をみたわけであるが、この刊行直前に先生はお浄土の人となられて了った。

この度、詠唱マニュアルの出版に当たり、本宗制定の新作・和讃並びに、認定された和讃を含めて、全曲の解説書出版の運びとなった。その後の制定・認定の和讃解説に関しては、作詞者直接に、また不可能の方に就いては、ご縁の方のお手を煩わした。関係各位のご協力に厚く御礼申し上げます。

平成九年秋彼岸

合掌 十念

松 濤 基 道

浄土宗吉水流 和讃解説書

不許複製

初版発行	平成 2年 3月 29日
第 二 版	平成 9年 12月 20日
第 三 版	平成 19年 10月 1日
第 四 版	平成 22年 6月 1日
第 五 版	平成 28年 4月 1日
第 六 版	令和 6年 4月 1日
編 集 人	松 濤 基 道
編 集	浄 土 宗 吉 水 講
印 刷	
発 行	総本山知恩院吉水講総本部 〒605-8686 京都市東山区林下町400 TEL 075-531-2157